Bulletin of Counseling and School Psychology
2016, Vol.53, 25－35

原　　著

定時制高校入学前の不適応と破壊的行動障害傾向との関連についての基礎的検討

新潟県立教育センター　吉原　寛
筑波大学人間系　藤生英行

Relationship between maladjustment before entering high school and the tendency of disruptive behavior for part-time high school students

Hiroshi Yoshihara (Niigata Prefectural Education Center, *Niigata-shi, Niigata 950-2144*)
Hideyuki Fujiu (Faculty of Human Science, University of Tsukuba, *Bunkyo-ku, Tokyo112-0012*)

The purpose of these studies were to explore some basic criteria for screening high-risk students by investigating the relationship between the tendency of having disruptive behavior disorder (DBD) and maladaptation for part-time high school students. In study 1, the participants were 69 part-time high school students. Correlation analyses were carried out to examine the relationships between student-assessed School Life Support Test (SLST) and stress response scale and teacher-assessed DBD scale, attention deficit/hyperactivity disorder (ADHD) scale and callous and unemotional traits (CU) scale. Results showed that the anti-social trend in SLST correlated positively with DBD and CU. In study 2, the participants were 69 part-time high school students. A multiple regression analysis by stepwise method was carried out with SLST and stress response scale as the independent variables, and DBD and CU as the dependent variables. Results showed that students who had higher anger emotions exhibited a higher DBD tendency. Based on these results, we discussed the relationship of DBD tendency with maladaptation for part-time high school students.

Key words: disruptive behavior disorder, attention deficit/hyperactivity disorder, callous and unemotional traits, part-time high school student, maladaptation.

問　題

定時制高校では，全日制高校と比較し，不登校や非行の問題など，学校不適応となる生徒が多い。その一因として，中学時に学校不適応の経験を持つ生徒の入学が多いことが関係していることも十分考えられる。

「平成26年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省，2015a）によると，1年生の不登校生徒の割合は，全日制高校の1.3%に対し，定時制高校では13.2%とかなり高い。その要因には，遊び・非行（17.0%），無気力（37.0%），不安による情緒的混乱（10.1%）などが挙げられている。

非行を例に取り上げてみると，「平成26年中における少年の補導および保護の概況」（警察庁，2015）の非行者数，および「平成26年度学校基本調査」（文部科学省，2015b）による生徒数をもとに，非行者の出現率を算出して比較すると，1万人あたり，全日制高校普通科在学者で90.2人，定時制高校在学者では350.2人となり，後者

での出現率が極めて高いことがわかる。また，非行などの問題行動を理由に中途退学した定時制高校の生徒の割合は，3.2%と決して少なくない（文部科学省，2015a）。

非行は，本人にダメージを与えるだけでなく，家族や社会への影響を及ぼす行動とされる（小野，2009）。「平成11年度犯罪白書」（法務省，1999）では，非行による被害者家族への影響が調査され，「家庭が暗くなった」「精神的なショックを受けた」など，被害者家族への影響が大きいことを報告している。佐賀新聞（2013）は，非行少年の存在は在校生への不安を高めるなどの影響があること，非行少年に対する指導は教員の負担感が高いこと，学校での指導は結局のところ懲罰的な指導に頼らざるを得ないことを伝えている。しかし，学校における非行指導については，懲罰的な指導に終始するのではなく，精神医学的視点を取り入れた予防的対応，事後対応が必要なのではないかと考える。

そこで，はじめに，非行に関連する障害について概観する。非行とは，司法の立場で用いられる法律用語であり，一般的に未成年の反社会的行動を指す。非行に相当する障害に関して American Psychiatric Association（以下，APA）（2000，高橋・大野・染矢（訳），2004）の DSM-IV-TR では，「注意欠陥および破壊的行動障害（Disruptive Behavior Disorder；以下 DBD）」のカテゴリーで示され，素行障害（Conduct Disorder；以下 CD），反抗挑戦性障害（Oppositional Defiant Disorder；以下 ODD），注意欠陥・多動性障害（Attention Deficit/Hyperactivity Disorder；以下 ADHD）が含まれる。藤生（2006）は，DSM-IV-TR をもとに CD，ODD を以下のように説明する。CD は，「重篤な反社会的・攻撃的な行動からなり，他者の権利の重大な侵害，主要な年齢にあった規範からの逸脱を含む。人や動物に対する攻撃性（e.g. いじめ，けんか），所有物の破壊（e.g. 放火，他者の所有物の破壊），だますことや盗み（e.g. 家宅侵入および押し込み，被害者に対面しないでの盗み），重大な規則違反（e.g. 13歳以前に家出する，学校をさぼる）の4つのグループに分類される」としている（藤生，2006）。ODD については，「ネガティブな行動（e.g. 故意に他の人々を悩ませることをすること，自分のミスのために他者を責めること），反抗的行動（e.g. 大人のルールや要請に従わなかったり，反抗すること），敵対行動（e.g. かんしゃくを起こす）のパターンがある」としている（藤生，2006）。また，「小・中学校における LD（学習障害），ADHD（注意欠陥／多動性障害），高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）」（文部科学省，2004）では，ADHD について，「年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力，及び／又は衝動性，多動性を特徴とする行動の障害で，社会的な活動や学業の機能に支障をきたすとされ，7歳以前に現れるとその状態が継続し，中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される」とする。

ADHD と ODD，CD については，これらが共存することは広く容認されており（Bird, Gould, & Staghezza, 1993），齊藤・原田（1999）は ADHD を起点に年齢とともに ODD から CD へと DBD 内の診断名が移り変わり，最後に反社会性パーソナリティ障害にいたる変遷を DBD マーチという概念で表している。Christian, Frick, Hill, Tyler, & Frazer (1997) は，ADHD と CD の関連とともに CD と callous-unemotional traits（以下 CU 特性）が関連していることを報告している。CU 特性とは，「冷淡で，情緒の表出を抑え，共感性と罪悪感に欠けている特性」（Paul, Frick, Cornell, Barry, Bodin, & Dane, 2003）とされ，藤生（2006）はこの概念に非情緒性という邦訳をあて，着目している。以上のことから ADHD，ODD，CD，CU 特性は関連があると考えられるため，本研究ではこれらをまとめて DBD 傾向と呼ぶ。

次に，非行と DBD 傾向との関連について概観する。岩瀧・山崎（2014）は，非行や発達障害に関連する要因として，多くの先行研究が CD に焦点を当てていることを指摘する。これまで包括的に DBD 傾向を取り上げた研究はほとんどない。また，教育領域や SC からのサポートを取り上げた実践についても，武内・大井（2000）の他はほとんど見られない（岩瀧・山崎，2014）。藤生（2006）は，中学生を対象に生徒の自記式による SLST-学校生活サポートテスト（杉原・藤生・熊谷・山中，2002：以下 SLST）と教師評定による DBD 傾向との関連を検討している。藤生（2006）によれば，ODD と SLST の全下位尺度，CD と SLST の注意の問題・衝動性傾向，反社会傾向，家族の悩みの間で，有意な正の相関が見られた。また，ADHD の多動性・衝動性と SLST の反社会傾向，ADHD の不注意と SLST の不登校・学校嫌い傾向，引きこもり・非社交性傾向，注意の問題・衝動性傾向，反社会傾向，家族の悩みの間で，有意な正の相関が見られたとしている。さらに，CU 特性と SLST の思いつめ傾向以外の下位尺度との間で有意な正の相関が見られ，SLST と DBD 傾向には一部の尺度を除き，一貫して正の有意な相関が得

られている。しかしながら藤生（2006）は，一般の中学生を対象としており，多様な問題を抱えた定時制高校においても同様の結果が得られるかどうかは明らかでない。また，吉原（2016）は，ストレス反応尺度の不機嫌・怒り感情が非行傾向に影響を与えることを示唆しているが，定時制高校入学時のストレスと DBD 傾向との関連については検討していない。

以上を踏まえて，本研究は，定時制高校入学前の生徒の学校不適応と DBD 傾向の関連を検討することで，リスクの高い生徒を早期にスクリーニングし，予防的介入に役立てるための基礎的知見を得ることを目的とする。生徒の学校不適応については生徒の自記式 SLST とストレス反応尺度，DBD傾向については教師評定によるDBD傾向の尺度を用いる。研究 1 では，高校入学時の生徒を対象に，学校不適応と DBD 傾向との関連を検討する。そして，中学生を対象とした藤生（2006）と同様な結果が得られるかどうかを検証する。研究 2 では，高校入学前における生徒の学校不適応が，高校入学後の DBD 傾向に影響を与えているかを検証する。入学前における生徒の学校不適応から DBD 傾向の予測が可能であれば，生徒のサポートを行う上での貴重な基礎的資料となる。

研　究　1

1．目的

生徒の学校不適応を測る自記式尺度と教師評定による DBD 傾向尺度との関連を検討する。

2．方法

研究協力者　［生徒］単位制による定時制高等学校 1 校 1 年生 2 クラス計 69 名（男子 31 名，女子 38 名，年齢範囲：15 歳～17 歳，平均年齢：15.20 歳（*SD* =0.44））を対象とした。調査時に，すでに中学を卒業しており，卒業後すぐの入学でない生徒（以下，過年度卒）の割合は，18.6%であった。

［教師］研究協力者である生徒の出身中学に在籍し，その生徒を理解し質問紙に回答できる教員を対象に，65 名の教員から回答を得た。

実施時期　2009 年 3 月～5 月に行った。

生徒用の質問紙の構成

1）フェイスシートについて

フェイスシートには調査の目的を示し，質問紙への回答は生徒の自由意志による同意に基づくこと，回答をしなくともいかなる不利益も生じないことが記載された。さらに，回答後のデータ処理や活用方法についての説明を記載し，出席番号と性別を記入する欄を設けた。

2）高校生の不適応を測る尺度

SLST（杉原他，2002）を使用した[1]。SLST は標準化された，9 つの下位尺度（「不登校・学校嫌い傾向：8 項目」，「引きこもり・非社交性傾向：8 項目」，「いじめの問題傾向：7 項目」，「体調不良：11 項目」，「思いつめ傾向：9 項目」，「注意の問題・衝動性傾向：12 項目」，「反社会傾向：8 項目」，「家族関係の悩み：5 項目」，「妥当性：4 項目」）からなる尺度である。「いいえ：1 点」，「どちらかといえばいいえ:2 点」，「どちらかといえばはい:3 点」，「はい：4 点」の 4 件法で回答してもらい，得点化を行った。なお SLST の使用に際しては，質問紙を購入した上で出版社に研究目的を説明し，許諾を得て使用した。

3）高校生版ストレス反応尺度

吉原・藤生（2005）を使用した。4 つの下位尺度（「抑うつ・不安感情」，「不機嫌・怒り感情」，「身体的反応」，「無気力的認知・思考」）からなり，各 4 項目，合計 16 項目の尺度である。「全くあてはまらない：0 点」，「あまりあてはまらない：1 点」，「かなりあてはまる：2 点」，「非常にあてはまる：3 点」の 4 件法で回答を求め，得点化を行った。

教師評定の質問紙の構成

1）ODD に関する尺度

藤生（2006）により，DSM-IV-TR の ODD の症状に対応した 8 項目からなる尺度を用いた。それぞれの項目について，「決してない：1 点」，「時々ある：2 点」，「しばしばある：3 点」，「常にある：4 点」の 4 件法で回答を求め，得点化を行った。藤生（2006）において，α 係数による信頼性，研究者と心理学専攻大学院生 3 名による内容的妥当性は確認されている。

脚注 1：生徒の不適応については，現在学校現場では，学校適応・不適応を測る尺度として，Q-U（河村，1998）やアセス（栗原・井上，2010）などの尺度が使われている。しかし，Q-U やアセスは，学習面や友人関係面など学校場面での適応を測った尺度である。一方，SLST は臨床的な立場から，個人の学校適応を幅広く捉えていることで，DBD 傾向を測ることができる尺度となっている。また，本研究では，藤生（2006）との比較を行うことも目的としているため SLST を用いることとした。

2）CDに関する尺度

藤生（2006）により，DSM-IV-TRの素行障害の症状に対応した9項目からなる尺度を用いた。それぞれの項目について，「決してない：1点」，「時々ある：2点」，「しばしばある：3点」，「常にある：4点」の4件法で回答を求め，得点化を行った。藤生（2006）において，α係数による信頼性，研究者と心理学専攻大学院生3名による内容的妥当性は確認されている。

3）ADHDに関する尺度

藤生（2006）で作成された尺度を用いた。「多動性・衝動性」と「不注意」の2つの下位尺度からなる，各4項目の尺度である。それぞれの項目について，「決してない：1点」，「時々ある：2点」，「しばしばある：3点」，「常にある：4点」の4件法で回答を求め，得点化を行った。藤生（2006）において，α係数による信頼性，研究者と心理学専攻大学院生3名による内容的妥当性は確認されている。

4）CU特性に関する尺度

藤生（2006）より作成された6項目の尺度を用いた。それぞれの項目について，「まったく違う：1点」，「少し当てはまる：2点」，「まったくその通り：3点」の3件法で回答を求め，得点化を行った。藤生（2006）において，α係数による信頼性，研究者と心理学専攻大学院生3名による内容的妥当性は確認されている。

手続き　［生徒］高校合格後の合格者登校日に，SLST，ストレス反応尺度の各尺度について各教室で一斉に調査を行った。回答は回答者のペースで行われた。回答終了後，各自で質問紙を封筒に入れ，担任に提出した。

［教師］ODD，CD，多動性・衝動性，不注意，CU特性を測定する尺度について，研究協力者である生徒の出身中学に送付し，回答を得た。過年度卒の生徒で，その生徒をよく知る教員がいない場合は，提出の必要がないことを伝えた。

［自己評定と教師評定の一致方法］自己評定の質問紙と教師評定の質問紙を一致させるために，それぞれ事前に出席番号と性別の記入を求めた。なお，出席番号と性別により個人が特定できるような名簿は収集しなかった。回収は個々に封筒を配布し，回答後，封筒に入れて個人が特定できないように回収した。

倫理的配慮　調査対象校校長の許可，および研究協力者の同意を得た上で，個人情報が漏れないようにデータは収集された。データは鍵の掛かるところに保管し，一

Table 1　SLST，ストレス反応，教師評定の下位尺度の*N*数と平均値，標準偏差，α係数

尺度	*N*	平均値	標準偏差	α係数
SLST				
不登校・学校嫌い	67	17.90	6.48	.84
引きこもり・非社交性傾向	68	14.97	4.48	.78
いじめの問題傾向	69	11.49	4.22	.86
体調不良	68	22.88	6.70	.81
思いつめ傾向	69	19.10	5.72	.80
注意の問題・衝動性傾向	69	25.38	6.62	.83
反社会傾向	69	14.58	4.49	.76
家族の悩み	68	10.21	3.41	.75
ストレス反応				
抑うつ・不安	69	2.12	2.89	.88
不機嫌・怒り感情	69	2.58	3.08	.85
身体的反応	69	3.55	3.52	.84
無気力	68	3.63	3.11	.77
教師評定				
反抗挑戦性障害（ODD）	64	11.78	3.88	.91
素行障害（CD）	64	8.08	1.94	.72
多動性・衝動性	65	4.57	1.09	.69
不注意	65	7.26	2.70	.82
非情緒性（CU特性）	64	9.64	2.13	.71

定期間経過後はシュレッダーにかけるようにした。その他,前述したようにフェイスシートに書かれた配慮を行った。

3．結果

分析手順　SLST，ストレス反応尺度，ODD，CD，多動性・衝動性，不注意，CU 特性の各尺度は，各項目得点を下位尺度ごとに合計したものを下位尺度得点とした。ただし，CD の 2 項目は分散が 0 だったため，分析から除いた。各下位尺度の N 数，平均値，標準偏差，α 係数を Table 1 に示す。次に，高校入学前における生徒の自己評定による学校不適応と，教師評定による DBD 傾向の関連を調べるため，相関分析を行った。結果を Table 2 に示す。最後に，教師評定による下位尺度間の相関を見るため，相関分析を行った。結果を Table 3 に示す。

生徒自己評定と教師評定の相関　SLST の反社会傾向と ODD，CD，不注意，CU 特性の間で，それぞれ有意な正の相関があった（r =.36，p<.01；r =.57，p<.01；r =.32，p<.05；r =.32，p<.05）。

SLST の注意の問題・衝動性傾向と不注意の間で，有意な正の相関があった（r =.41，p<.01）。SLST の各尺度と多動性・衝動性には，有意な相関は見られなかった。

ストレス反応尺度の不機嫌・怒り感情，無気力と，不注意の間で，それぞれ有意な相関があった（r =.27，p<.05；r =.31，p<.05）。ストレス反応の無気力と CU 特性の間で，有意な正の相関があった（r =.27，p<.05）。ストレス反応の各尺度と，ODD，CD，多動性・衝動性には，有意な相関は見られなかった。

教師評定間の相関　下位尺度間のすべてにおいて，.31～.71 の値で有意な正の相関が見られた。

4．考察

自己評定と教師評定の相関　教師評定による ODD については，反社会傾向のみ，有意な正の相関が見られた。

Table 2　高校入学前の生徒の SLST，ストレス反応と中学校教師評定との相関

尺度	教師評定 反抗挑戦性障害(ODD)	素行障害(CD)	多動性・衝動性	不注意	非情緒性(CU 特性)
SLST					
不登校・学校嫌い	.14	.14	-.01	.01	.14
引きこもり・非社交性傾向	.11	-.06	-.14	.11	.23
いじめの問題傾向	.10	.04	-.15	.06	.17
体調不良	.07	-.07	-.02	.12	.16
思いつめ傾向	.02	-.17	-.18	.07	.14
注意の問題・衝動性傾向	.06	.10	-.07	.41**	.17
反社会傾向	.36**	.57**	.16	.32*	.32*
家族の悩み	.02	.00	-.03	.21	.09
ストレス反応					
抑うつ・不安	.09	.05	-.01	.04	.14
不機嫌・怒り感情	.20	.10	-.04	.27*	.22
身体的反応	-.03	-.17	-.11	-.01	.05
無気力	.09	.01	-.06	.31*	.27*

*p<.05，**p<.01

Table 3　教師評定による下位尺度間の相関

尺度	反抗挑戦性障害(ODD)	素行障害(CD)	多動性・衝動性	不注意	非情緒性(CU 特性)
反抗挑戦性障害（ODD）	-	.71**	.52**	.39**	.65**
素行障害（CD）		-	.49**	.31*	.45**
多動性・衝動性			-	.49**	.40**
不注意				-	.44**
非情緒性（CU 特性）					-

*p<.05，**p<.01

ODDに関する内容から，反社会傾向の尺度に関する内容は一致すると考えられる。藤生（2006）では，SLSTのすべての下位尺度と有意な正の相関が見られており，異なる結果となった。本研究では有意になる下位尺度が少なかったが，不登校・学校嫌い（r=.14），引きこもり・非社交性傾向（r=.11）は，藤生（2006）の結果に近く，研究協力者数の少なさによる影響と考えられる。

教師評定によるCDについて，有意な正の相関が見られたのは反社会傾向のみだった。藤生（2006）では，SLSTの注意の問題・衝動性傾向，反社会傾向，家族の悩みと有意な正の相関があり，一部のみを支持する結果となった。しかし，注意の問題・衝動性傾向（r=.10）では有意とならなかったが，相関係数では藤生（2006）の値を上回っており，同程度の関係性があると考えられる。CDに関連する内容である反社会傾向と有意な中程度の相関（r=.57, p<.01）があり，反社会傾向はCDを測る指標になりうる可能性が示唆された。

教師評定によるADHDの多動性・衝動性については，有意な相関は見られなかった。藤生（2006）では，SLSTの反社会傾向と有意な正の相関があり，一部異なる結果となった。ただし，多動性・衝動性はSLSTの反社会傾向との相関係数がr=.16であり，藤生（2006）とほぼ同じ値を示し，関連性が示唆された。また，ADHDを測る注意の問題・衝動性傾向とも有意な相関は見られなかった。高校入学前における生徒の自己評定による学校不適感と教師評定のDBD傾向との間には，認知に差がある可能性が考えられる。今後さらに検討が必要である。

教師評定によるADHDの不注意については，SLSTの注意の問題・衝動性傾向，反社会傾向と有意な正の相関が見られた。藤生（2006）では，同様に注意の問題・衝動性傾向，反社会傾向と有意な正の相関が見られており，結果を支持している。注意の問題・衝動性傾向は生徒のADHD傾向を測る尺度となっており，生徒の自己評定による尺度と教師評定による尺度の関連の高さを示した。ADHDの「不注意」を測る尺度として，信頼性と妥当性が高いのではないかと思われる。また，ストレス反応尺度の不機嫌・怒り感情と無気力も，教師評定の不注意と有意な正の相関が見られた。不注意の事態が起こることで，周囲からの適切なサポートが行われないと，自己肯定感が低下し，二次的な問題として周囲に対する不機嫌・怒り感情が表出したり，何ごとに対してもやる気をなくして無気力になる可能性が考えられる。このときに，周囲からの適切なサポートがさらに得られないと，二次障害として，ODD，CDへと移行していくことも考えられる。

教師評定のCU特性については，SLSTの反社会傾向と有意な正の相関が見られた。藤生（2006）では，SLSTの思いつめ傾向以外の下位尺度で有意な正の相関が見られ，一部のみ支持する結果となった。ただし，SLSTの反社会傾向以外の下位尺度との相関係数は，藤生（2006）とほぼ同じ値を示し，研究協力者数の少なさにより有意とならなかったのではないかと考えられる。Christian et al.(1997) は，CU特性とDBDとの関連を明らかにしている。DBDの項目を含む反社会傾向と有意な相関が見られることから，妥当な結果であろう。また，ストレス反応の無気力と有意な正の相関が見られたが，生徒の無気力状態は，教師から冷淡で共感性に欠けるCU特性の状態に類似していると判断してしまう可能性が考えられる。無気力とCU特性の違いについて，さらに検討を加えていく必要があるかもしれない。

教師評定による下位尺度間の相関

ADHDとODD，CDの関連性についても，Bird et al.(1993)の結果を支持する結果となった。さらに，藤生（2006）でも指摘されているように，CU特性とDBDとの関連についても同様な結果が得られ，DBDを持つ生徒はCU特性を一緒に兼ね備えている可能性が示唆された。

研究 2

1．目的

高校入学前におけるスクリーニングテストよる学校不適応が，高校入学後のDBD傾向に影響を与えるかどうかを検討する。

2．方法

研究協力者　［生徒］単位制による定時制高等学校1校1年生2クラス計69名（男子35名，女子34名，年齢範囲：15歳～19歳，平均年齢：15.22歳（SD=0.62））を対象とした。

過年度卒の生徒の割合は，16.2%であった。

［教師］各クラス2名の担任，計4名がそれぞれ独立して回答した。担任について，一方のクラスは40代男性と20代女性，もう一方のクラスは30代男性と40代女性であった。早期に不登校，中途退学した生徒など評価することが困難な生徒を除く63名の生徒についての回答を得た。

実施時期［生徒］2008年3月に行った。

［教師］2009年2月に行った。

質問紙［生徒］研究1と同様に，SLST，ストレス反応尺度を用いた。

［教師］研究1で使用した教師評定によるODD，CD，多動性・衝動性，不注意，CU特性の各尺度を用いた。

手続き　［生徒］研究1と同様の手続きを行った。

［教師］ODD，CD，多動性・衝動性，不注意，CU特性を測定する尺度について，年度末に各クラス2名の担任，計4名で教師評定による調査を行った。

倫理的配慮　研究1と同様の配慮を行った。

3．結果

分析手順　生徒による自己評定のSLST，ストレス反応尺度は，各項目の得点を下位尺度ごとに合計したものを下位尺度得点とした。なおSLSTの妥当性尺度は，今回は分析に使わなかった。教師評定によるODD，CD，多動性・衝動性，不注意，CU特性の各尺度は，2人担任制のため，2クラス計4名の担任による評定を行った。

2名の担任による教師評定の信頼性を確認するために各評定の相関を分析した。その結果，ODDはr =.48(p<.01)，CDはr =.70(p<.01)，多動性・衝動性はr =.71(p<.01)，不注意はr =.70(p<.01)，CU特性はr =.53(p<.01)となり，いずれも有意な中程度の正の相関が得られた。結果をTable 4に示す。

教師評定の信頼性が得られたため，はじめに担任それぞれの各項目得点を尺度ごとに合計し，次に同一クラス担任2名分を合計した得点の平均を各尺度得点とした。教師評定による各尺度のN数，平均値，標準偏差，α係数をTable 5に示す。

Table 4　教師評定における相関

	尺度	教師評定（1人目）反抗挑戦性障害（ODD）	素行障害（CD）	多動性・衝動性	不注意	非情緒性（CU特性）
教師評定（2人目）	反抗挑戦性障害（ODD）	.48**				
	素行障害（CD）		.70**			
	多動性・衝動性			.71**		
	不注意				.70**	
	非情緒性（CU特性）					.53**

**p<.01

Table 5　SLST，ストレス反応，高校教師評定の下位尺度のN数と平均値，標準偏差，α係数

	N	平均値	標準偏差	α係数
SLST				
不登校・学校嫌い	68	18.66	4.56	.77
引きこもり・非社交性傾向	68	15.26	4.51	.79
いじめの問題傾向	68	11.25	3.51	.76
体調不良	68	22.15	5.93	.78
思いつめ傾向	68	18.22	5.61	.81
注意の問題・衝動性傾向	68	25.46	7.16	.86
反社会傾向	68	15.12	5.00	.78
家族の悩み	68	10.01	2.87	.56
ストレス反応				
抑うつ・不安	68	2.21	2.73	.86
不機嫌・怒り感情	68	2.50	2.50	.77
身体的反応	68	3.21	3.08	.79
無気力	68	3.53	2.97	.78
教師評定				
反抗挑戦性障害（ODD）	63	10.57	2.90	.93
素行障害（CD）	63	10.21	1.63	.66
多動性・衝動性	63	4.56	1.26	.82
不注意	63	5.82	2.43	.93
非情緒性（CU特性）	63	10.54	2.07	.80

家族の悩みの尺度とCDの尺度は信頼性が若干低かったが，予備的な検討のためそのまま分析に加えることとした。その他の尺度については，十分な信頼性が得られた。

生徒の自己評定によるSLSTとストレス反応尺度を独立変数，教師評定によるDBD傾向尺度を従属変数として，重回帰分析を行った。結果をTable 6～Table 9に示す。

生徒の自己評定によるDBD傾向の予測要因の検討　SLST，ストレス反応を独立変数，ODD，CD，多動性・衝動性，不注意，CU特性をそれぞれ従属変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った。

その結果，ODDでは決定係数（R^2）が有意であった（$F(2,58)=8.20$，$p<.01$）。そこで，標準偏回帰係数（β）を調べたところ，不機嫌・怒り感情から有意な正のパスが，思いつめ傾向から有意な負のパスが見られた（$\beta=.50$，$p<.01$；$\beta=-.39$，$p<.01$）。

Table 6　反抗挑戦性障害（ODD）を従属変数とした重回帰分析結果

変数名	r	β
不機嫌・怒り感情	.32	.50**
思いつめ傾向	-.16	-.39**
R^2		.22**

**$p<.01$

Table 7　素行障害（CD）を従属変数とした重回帰分析結果

変数名	r	β
不機嫌・怒り感情	.29	.37**
思いつめ傾向	-.09	-.41**
いじめの問題	.28	.34*
R^2		.24**

*$p<.05$，**$p<.01$

Table 8　多動性・衝動性を従属変数とした重回帰分析結果

変数名	r	β
不機嫌・怒り感情	.28	.46**
思いつめ傾向	-.17	-.39**
R^2		.20**

**$p<.01$

Table 9　非情緒性（CU特性）を従属変数とした重回帰分析結果

変数名	r	β
体調不良	.34	.34**
R^2		.12**

**$p<.01$

CDでは，決定係数（R^2）が有意であった（$F(3,57)=6.00$，$p<.01$）。そこで，標準偏回帰係数（β）を調べたところ，不機嫌・怒り感情から有意な正のパスが，思いつめ傾向から有意な負のパスが，いじめの問題傾向から有意な正のパスが見られた（$\beta=.37$，$p<.01$；$\beta=-.41$，$p<.01$；$\beta=.34$，$p<.05$）。

多動性・衝動性では，決定係数（R^2）が有意であった（$F(2,58)=7.02$，$p<.01$）。そこで，標準偏回帰係数（β）を調べたところ，不機嫌・怒り感情から有意な正のパスが，思いつめ傾向から有意な負のパスが見られた（$\beta=.46$，$p<.01$；$\beta=-.39$，$p<.01$）。

CU特性では，決定係数（R^2）が有意であった（$F(1,59)=7.77$，$p<.01$）。そこで，標準偏回帰係数（β）を調べたところ，体調不良から有意な正のパスが見られた（$\beta=.34$，$p<.01$）。不注意には有意なパスは見いだせなかった。

多重共線性の問題が生じていないか確認するため，許容度とVIFを求めた結果，それぞれ.70～.80，1.24～1.44であり，多重共線性の問題は生じていないと思われる。

4．考察

不機嫌・怒り感情からの予測　生徒評定によるストレス反応尺度の不機嫌・怒り感情から，教師評定におけるODD,CD,多動性・衝動性に有意な正のパスが見られ，高校入学前に不機嫌・怒り感情が高い生徒は，高校入学後のODD，CD,多動性・衝動性を予測する可能性が示唆された。吉原（2016）は,不機嫌・怒り感情から非行傾向を予測しており,吉原（2016）を支持する結果となった。高校入学前の段階で怒りの感情を抱えて入学してくる生徒は，学校や教師に対する怒りや不信感を抱えて入学してくる可能性が高い。また，入学してからもその感情をうまく処理できずに学校へ適応できず，DBD傾向につながっている可能性が考えられる。齊藤・原田（1999）が指摘するように，学校の対応によってはADHDの多動性・衝動性からODD，CDとDBDマーチの状態が起こっている可能性も考えられる。

思いつめ傾向からの予測　一方，SLSTの思いつめ傾向はODD，CD，多動性・衝動性に有意な負のパスが見られ，入学前に思いつめ傾向の高い生徒は，DBD傾向を示さない要因となっていることが示唆された。杉原他（2002）によると,思いつめ傾向は，「深刻に思いつめている，あるいは心理的な疾患を持つ可能性のある子ども

を見つけ出す」尺度のため，一般的には DBD 傾向にはつながりにくいことが想定される。

いじめ問題からの予測　SLST のいじめの問題は，CD に有意な正のパスが見られた。高校入学前にいじめの問題が高い生徒は，高校入学後の CD を予測する可能性が示唆された。いじめの問題は，杉原他（2002）によると「自分は周りからいじめられていると感じている子どもの傾向を測定する尺度」であるとしている。国立教育政策研究所（2012）は，いじめ被害者といじめ加害者は頻繁に入れ替わることを明らかにしており，入学当初いじめられていると感じている子が，1 年後にいじめ加害者となり，CD 傾向をもつ可能性も考えられる。今後さらに詳細な検討が必要であると思われる。

体調不良からの予測　SLST の体調不良は，CU 特性に有意な正のパスが見られ，高校入学前に体調不良が高い生徒は，高校入学後の CU 特性を予測する可能性が示唆された。

杉原他（2002）によると，体調不良は「特にからだに関する訴え，症状を測定する尺度。単なる体調不良の場合もあるが，中には，テスト不安，心身症，心気症などのリスクのある子どもを見つけ出す尺度」であるとしている。藤生（2008）は，うつや不安など自己の内部に問題を抱えている状態を内在化問題と呼んでいる。藤生（2008）は，内在化問題と CU 特性との間には正の相関があることを明らかにしている。体調不良の生徒の中には内在化問題を有する生徒がいることが考えられる。

教師評定の不注意について　教師評定の不注意については，生徒の自己評定から有意なパスは見いだせなかった。研究 1 では，いくつかの尺度の間で相関が見られたが，研究 2 では不注意は予測できなかった。特に SLST の注意の問題・衝動性傾向との関連が見られず，長期間の調査では予測することが難しいことが示唆された。

全体的考察

最初に，本研究の目的と得られた結果について述べる。本研究は，定時制高校入学前の生徒の学校不適応と DBD 傾向の関連を検討することで，DBD 傾向のリスクの高い生徒を早期にスクリーニングすることができると想定して研究を進めた。そしてその結果から，予防的な介入に役立てるための基礎的な知見を得ることを目的とした。研究 1 では，生徒評定の SLST，ストレス反応尺度と教師評定の DBD，ADHD，CU 特性の同時期における関連を検討するため，相関分析を行った。その結果，SLST の反社会傾向と DBD および CU 特性との間で，正の相関が見られた。研究 2 では，高校入学前における生徒の学校不適応と，高校入学後一定期間後に DBD 傾向を評定し，それらの関連を検証した。SLST，ストレス反応尺度を独立変数，DBD，CU 特性を従属変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果，不機嫌・怒り感情が高い生徒は，DBD 傾向を表出する傾向が示唆された。

本研究を通じて，生徒の自己評定と教師評定の期間が同時期の場合と一定期間間隔を置いた場合では，結果が異なることが明らかとなった。入学後の学校生活における適応状況が結果に影響を与えることから，結果が異なるのは必然かもしれない。

次に今後の研究につながる有効な結果について考察する。研究 2 より，ストレス反応の不機嫌・怒り感情が高い生徒は，入学後の DBD 傾向が強くなることが示唆されたという知見は，早期の対応には有効な知見となりうる。不機嫌・怒り感情が強い生徒に対して，適切な対応を取ることで DBD 傾向を低減することができるのではないか。今後これらの基礎的な知見をもとに，予防的な介入につなげていく必要がある。

以下では，スクリーニングにおけるリスクについて述べる。Kazdin（1995 田中（監修）・吉田（訳） 2013）は，人生の早い時期にリスク因子が高いと判断された後に問題を発症する人たちが，理想の値より実際の値の方が低くなることを理解しておく必要があるとしている。つまり，リスク因子のある生徒でも発症しない生徒もいるということである。安易なスクリーニングによって，介入が必要ない生徒に対して無用な介入をしてしまう可能性がある。細心の注意を払って，スクリーニングを行っていくことが大切である。

最後に今後の課題について述べる。本研究では，研究協力者数が少なかったため，今回の結果は限定的にならざるを得ない。さらに研究協力者を増やして，DBD 傾向や CU 特性を予測する知見を得るための調査が必要である。また，研究協力者数が少なかったため，性別による分析は行わなかった。DBD 傾向には性差があるという知見もあり（e.g. American Psychiatric Association, 2000），今後，性別による検討も必要である。

また，教師評定の教師の評価能力における影響も無視できない。日頃からよく生徒を見ている教師とそうでな

い教師との間では，評価が異なる場合も考えられる。さらに教師の性別によって教師評定の結果も変わってくることも考えられる。この点については本研究の限界として捉えられる。

本研究では，DSM-IV-TR の診断基準をもとに論じてきた。2013 年 5 月に American Psychiatric Association（2013 髙橋・大野(監訳) 2014)が公刊した DSM-5 では，ADHD と ODD および CD は切り離され，ADHD は神経発達症群／神経発達障害群（Neurodevelopmental Disorders），ODD および CD は，秩序破壊的，衝動制御，および素行症群（Disruptive, Impulse-Control, and Conduct Disorders）の中に位置づけられている。また，CD の診断基準には特定項目の中に，「向社会的な情動が限られている」項目が挙げられており，その中に CU 特性に関する記述がされている。本研究は，DSM-5 が刊行される前に研究計画が立てられ，調査が行われており，本研究の結果が，そのまま，DSM-5 による分類，診断基準に適用できるか，今後検討していきたい。

引用文献

American Psychiatric Association (2000). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition, Text Revision (DSM-IV-TR),（髙橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳（2004）．アメリカ精神医学会「DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル（新訂版)」，医学書院）

American Psychiatric Association (2013). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition,（日本精神神経学会(日本語版用語監修)　髙橋三郎・大野裕(監訳)　染矢俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村　將・村井俊哉(訳)（2014）．アメリカ精神医学会「DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル」，医学書院）

Bird, H.R., Gould, M.S.,&Staghezza, BM(1993). Patterns of psychiatric comorbidity in a community sample of children aged 9 through 16 years. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry, 32*, 361-368.

Christian, R. E., Frick, P. J., Hill, N. L., Tyler, L., &Frazer, D. R.(1997). Psychopathy and Conduct Problems in Children: II. Implications for Subtyping Children With Conduct Problems. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry, 36*, 233-241.

藤生英行（2006）．行為障害傾向を持つ子どもへの介入プログラム開発のための基礎研究　平成 14 年度～平成 17 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書

藤生英行（2008）．中学校における外在化・内在化問題行動の関係　日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集，737.

法務省（1999）．平成 11 年版犯罪白書のあらまし＜http://www.moj.go.jp/housouken/houso_1999_hk1_0.html#z07＞（平成 28 年 3 月 10 日）

岩瀧大樹・山崎洋史（2014）．素行障害の男子中学生への援助事例研究ースクールカウンセラーによる認知行動療法的アプローチと学校コンサルテーションを中心にー　群馬大学教育実践研究，*31*, 217-229.

河村茂雄（1998）．Q-U：楽しい学校生活を送るためのアンケート　図書文化

Kazdin,A.E.(1995).Conduct Disorders in Childhood and Adolescence *Sage Publications*, Inc.（田中康雄監修・吉田ちはる訳（2013）．子どもと青年の素行障害：診断・アセスメントから予防・治療まで　明石書店）

警察庁（2015）．平成 26 年中における少年の補導及び保護の概況＜https://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/hodouhogo_gaikyou/H26.pdf＞(平成 27 年 12 月 1 日)

国立教育政策研究所(2013)．いじめ　追跡調査 2010-2012 いじめ Q＆A＜https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/2507sien/ijime_research-2010-2012.pdf＞(平成 27 年 12 月 1 日)

栗原慎二・井上　弥（2010）．アセスの使い方・活かし方　ほんの森出版

文部科学省(2004)．小・中学校における LD(学習障害)，ADHD（注意欠陥／多動性障害），高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）＜http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1298152.htm＞(平成 28 年 3 月 10 日)

文部科学省（2015）．平成 26 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査＜http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/09/__icsFiles/afieldfile/2015/10/07/1362012_1_1.pdf＞(平成 27 年 12 月 1 日)

文部科学省（2015）．平成 26 年度学校基本調査＜http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2014/12/19/1354124_1_1.pdf＞(平成 27 年 12 月

1 日）

小野善郎（2009）．思春期の非行・自殺　母子保健情報，*60*, 67-71.

Paul, J., Frick, P. J,,Cornell, A. H.,Barry, C. T., Bodin, S. D., & Dane, H. E.(2003). Callous-Unemotional Traits and Conduct Problems in the Prediction of Conduct Problem Severity,Aggression, and Self-Report of Delinquency *Journal of Abnormal Child Psychology, 31(4)*, 457-470.

佐賀新聞（2013）．さが非行の周辺　立ち直りの居場所＜ http://www1.saga-s.co.jp/news/education2013.23.0.class .html＞（平成 28 年 3 月 10 日）

齊藤万比古・原田　謙（1999）．反抗挑戦性障害　精神科治療学，*14*, 153-159.

杉原一昭・藤生英行・熊谷恵子・山中克夫（2002）．学校生活サポートテスト　子どもの SOS に答えるために　田研出版

武内珠美・大井美保（2000）．小学校における行為障害児童に対する校内チームと家庭・専門機関との連携による援助の事例　大分大学教育福祉科学部附属教育実践研究指導センター紀要，*18*, 25-36.

吉原　寛・藤生英行（2005）．友人関係のあり方とストレッサー，ストレス反応の関係　カウンセリング研究 *38*, 128-140.

吉原　寛（2016）．高校生の学校ストレッサーに関する研究　風間書房